

今度守筋目可抽忠節由尤無比類候依之上郷内新井并田分三省分箱井事充行之候知行不可有相違者也仍如件

天文十七年八月十五日 晴景 花押

山村右京亮殿

同年十二月晴景ヨリ景虎へノ書左ノ如シ

為音信樽肴到来喜入候猶期永日之時候恐々謹言

天文十七年十二月廿一日 晴景 花押

長尾平三殿

同十八年正月七日定實下郡ノ徒ニ命シ景虎并ニ本莊繁長宇佐美定行ニ命シテ菅原安田村松等ノ要害ヲ攻シム同十日新發田尾張守長敦ヲ差向賊將野本大膳笹塚總左衛門ヲ討取是ヨリ下郡ノ賊徒自由ヲ得ス黒田金津等ノ勢力大ニ衰ヘ僅ニ殘黨ヲ集メ新山黒瀧兩城ニ據ル景虎ヨリ小越平左衛門へノ

書左ノ如シ

今度村松要害攻落刻上尾被討取之段神妙至候弥以可勵粉骨候也

天文十八年正月廿六日 景虎 花押

小越平左衛門殿

舊記ノ儘

同年夏晴景君諸臣を集て宣小極ハ我々先考の嫡子ニ付家督を継ぎしと不幸なりて生来多病小して國子ニ任せ凡殊ニ賊徒近々増トニ増起一ニ死國統を失はんとす去平六を如先凶徒大半掃蕩せて是誠り武功あり凡弟景虎ハ幼年よりとんと智勇衆小秀てき上近年軍功あり皆人の知る所なり此度長尾の家督景虎ニ譲らんを思ふ小あり何れ其思ふや何と問ひの小直江大和守家綱只見次郎在事門家吉大熊備あり朝秀

本莊新左衛門為家子席末侍して老悦の眉を舒る長尾再興
其子此時なるを以て口を固めて賞賚しはる一決し其れ
ハ時を多したる橋尾の侵を立景席公へ申す景席公大ニ怒
死す以我子幼年にして其任小者人として所容許の色もな
し晴景君より侵去年三及とし一より其命小使いひては晴景
君大ニ憤りひ以今我の所ハ國の安危家の存亡の預る所なり
おるよ有くハ志社に對して不孝の第一とせりては侵去をせり
る

五月廿日晴景君大ニ憤りひ以まて直江大和守家綱大無備前守
躬秀と橋尾城へ遣さき晴景君此言の趣を委く申す景席公
諱る忠承お何事斯く上ハ此言の趣違背せしめ探せしめては法
仰せり同日晴景君直に橋尾城へ出入直に何事景席公不
お止府内城におりひ以定家公市道の嚴命再三り及て法臣と

頻に勸免する景席公初ハ辞讓しひ小とし今ハ此命を死
きおは猿千代と長迄市旗に預り國中の政事巨細をなく定
實公の部下知を文と勤むるやはま又彼 仰上
同十九年二月景虎三條ノ城ヲ攻ム城陥リ多ク敵兵ヲ殺戮ス
和泉守敗走シテ新山ニ籠城ス晴景景席ノ書左ノ如シ

今度敵方之人數以多勢成働所早々取懸得勝利刺和泉守
建討神妙之至候抽忠勤尤候謹言
天文十九年二月十二日 晴景花押

高松隼人殿
雖不珍候今度三條之地及攻破如世儀無比類候向後孫可
相咄者也

二月十二日 景虎花押
新津彦次郎殿

同月廿八日、白傘袋毛氈鞍覆之事、大覺寺大僧正義俊取成ヲ以テ、是利義輝許容アリ、乃神餘隼人正親綱ヲ京都ニ登セ謝儀トシテ、義輝へ太刀一腰馬一匹青銅三千匹ヲ獻シ、管領細川晴元江州觀音寺城主佐々木元正少弼定頼へ贈物アリ、義輝ヨリ内書大館左衛門佐晴光ヨリ奉書、義俊ヨリ書策達ス、又晴元定頼ヨリ返策来ル

同廿年正月朔、日夜高梨源三郎滿義新山ノ城ヲ襲ヒ和泉守及ヒ賊徒多ク討取、景庠ノ書左ノ如シ

其方十八歳之春新山之地企行城主共不漏退治之儀無比類候然者、伐々續武邊誠以名譽之至不淺候恐々謹言

天文廿年正月二日 景虎 花押

高梨源三郎殿

同年長尾越前守房長同六郎政景去年ヨリ逆意ノ企風聞アリ

依之景庠上田へ出馬スヘシト辨令ヲ下ス、房長父子恐懼シテ救宥ヲ乞ニ付、出馬ヲ止ムト雖、比高聊ノ音信ナシ、乃七月廿三日重テ陣觸ヲナシ、八月朔日ニ出發セシトス、房長父子是又聞テ大ニ狼狽シ、使者ヲ以テ誓詞ヲ奉シ、頻ニ和睦ヲ乞フ、景庠拒ム心アリシカ、比老臣共強テ諫諄スルニ付、和睦ヲ整ヘ、景庠ノ姊ヲ以テ政景ニ嫁ス

同廿一年五月、景虎彈正少弼ニ任ス、謝儀トシテ神餘隼人佐親綱ヲ京都ニ登セ、義輝へ太刀一腰馬一匹、河原青銅三千匹、黄鷹一居ヲ獻ス、義輝ヨリ内書アリ、且太刀一振、宗ヲ賜フ

同年八月、景庠（思頭）ノ小ニ越後大寺の葦面（武威）を振（ハ）ハ、勅尔志と卷さんと志もの本是を共佐重主は亡國の基なり殊我今差事なとは一類、潛代汝始々随順の色何ととも内心おも量一範一と予を極人の以上田政景君へ

法書者を以て我元晴景の讓を承て家と終り莫大の面目とし
しへと病者といひ其苦に何れに争う一族國民の上なきと政事
を西より人をも上誅め佐多人とねむとは別る我國政治を中
りかく所論此國を立出ぬ高野山へ極道の志を遂げんと佐
せきとて是府内城と出り小政景君是と見て大に怒りさひ諸
士を集めは諸一の小諸士大々因章一國中の告布あるは
貴賤上下をなく此君極道一のいふ中大衆説くは隣國より
と入るをたし通大切の子を一刻とあしく引戻し人々を
政景君とて一の思ひし小地出関の山如香山して進有奉り辭
我同く表裏孤述ととたは入るをたしおつは為景公は以来
の未基業を皆みの記をたし越後とたしく他人の子を渡り申す
しと各涙孤流して為免奉るふと公を尤もつ文の以奉祀各
の申所尤なり我既徳道の心法したきとも國の政事も退居し

あつて世上の批判を先社の武名を汚さん中口惜しき次第な
り依之各のまゝ足不足以府内に於て永く國事を安んずるに
て誓詞を授く政景君へ出のふめ左

連々めし舊方越後萬端退居此事は存心者ト云
甲斐々々しき者をも持しつる越後存心者不通小國の
望存切方遠に他國難降為方今退屈罷下を儀きし方及復
道方尤更に國本法造化少と罷成同委方欲め此心中偽を
法に方好方初責所國中の面と心責難黙止其又予矢た道
了様自他尤に批判可有之ある不入何斗と貴所任法意見
故此申事毛頭儀きし方日本大小神祇八幡大菩薩天満天
神氏神春日大明神氏可羅蒙方少と云他事了恐し謹言
八月十七日 彈正小御
景虎

越前守殿

此時之傳供ハ安田松八郎匡廣也 匡廣ハの所書み左

今度徳直ハ代神妙ニ依之一字定有る所と出方當家潤

字ニ申出方也仍め件

七月廿三日 景虎

安田松八郎殿

公既ニ傳直ニ志思止り少ハ皆ニ喜悅の眉瓜開き
るに公又我下知ニ宵くする由昔起證文取出
り各所上ニ於て一紙連平の誓紙取差上る公即日
安の山ニ於て一
存内ハ法傳國行此時中條越前守藤資三の忠節以て
番に證人を差上りハ法士ニ統我れと證人差上る
後前
方ニ不義野心の輩大身小身合て十六人林泉寺
ニ於て切腹致
行付きとも誓紙證人取出たる上るれは證行一
言出凡者

あ一乞う國中ニ諸士古言忠義のゆゑ汝を抱き
法威勢を恐
むる 以上誓紙の傍

同廿二年二月十日 孫六郎晴景卒入法名千巖寺殿華嶽光榮

同年閏二月景序物語ニ事寄セ上浴ニ是利義禪ニ謁し同年四

月十日景序勅命ニ依テ参内ニ天盃頂戴隨テ勾當内侍

殿慮ノ趣ヲ廣橋中納言國光ニ達ス國光 詔ヲ承テ景虎ヲ饗

應ス日ヲ経テ 諭旨ヲ賜フ左ノ如シ

平景虎任國并鄰國揆敵心葦所被治罰也傳威名子孫施勇

德萬代亦決勝於千里宜盡忠於一朝之由可令下知景虎給

者依 天氣言上如件

天文廿二年四月十二日 權中納言奉

進上廣橋大納言殿

同年十二月大德寺徹坤和尚ヨリ受戒ノ文ヲ授ケラレ法名ヲ

宗心ト辨ス

右當家ノ史策及ヒ士族ニ藏スル所ノ舊書簡トヲ以テ事蹟ヲ著ス者ナリ輝虎父爲景ノ跡ヲ繼キ且兄晴景ヲ攻殺スルト云フテ史策士族ノ舊記ニ無之ヲナレハ其説ノ虚妄ナルヲ明ナリ故ニ天文十一年父爲景死去ノ年ヨリ同廿二年晴景死去ノ年ニテ十二年ノ間舊書簡ヲ掲テ徴トナス唯天文十二年ト同十六年トノミ書簡ナシト雖モ十一年ハ爲景死去ノ砌ニテ争端ヲ生セサルヲ疑ナシ十六年ハ其前後年ノ書簡ヲ見レハ聊争戦ノ色ナシ廿二年モ書簡ナケレハ其二月晴景死スレハ書簡ノ有無論スルニ及ハス十八年ノ一條ヲ見レハ兄晴景ノ家督ヲ授受スルヲ明瞭又十九年二月ノ書ニ通ラ以テ考フルニ兄弟二人始終全ク力ヲ戮セ逆臣ヲ平定シタルヲ較著ナリ豈兄弟

争戦ノコトアラニヤ

古書の儘

天正六年三月九日午之刻謙信公俄ニ中風の患症故文の以卒
倒し人子と稱しぬは一族を如法に勤行するの限りか
其内法大僧并法老屋中琴柿ニ堪えす内外の法醫を招き佛神
ニ法堂社へ代案孤走せし禱祭亦其法老とソノトモキモ
那直江大和守景綱の法室中枕を近しく候て高きより法跡
月夜相續ハ何と云ふ或景勝公少て其威と其内法亦取不
言を也叶ひぬはされともうらハト此法探子もて法首肯
一ぬひりぬハ並居たる法臣皆喜悅の眉目と舒々たる同十三
日赤為氣法叶無し未と刻眠るめく逝去一ぬ小市年世
十九所辞世也左
四十九年一睡夢一期榮華一盃酒嗚呼柳緑花紅

蒲輪譜上杉之部輝虎殺元ノ説アルヲ疑ヘリ他諸書ニモ其
事ヲ謬傳スルアリ茲昔米澤藩記録頭片桐忠成其事ノ謬傳
スルヲ覆ヒ上杉家ノ旧書記ヲ探索シ其證ヲ舉ケテ之ヲ正
セルモノ記室ニ遺レリ今拜呈シテ以テ御参考ニ備フ

右 上杉輝虎傳

上杉茂憲